

# サンドとラムネー

## ——『マルシへの手紙』をめぐる宗教観——

吉 田 綾

### はじめに

1876年6月、71歳で永眠したジョルジュ・サンドの葬儀はカトリック式で執り行われた。しかし、親族の間では宗教儀式ぬきの埋葬にしてはどうかと議論になった。故人の反聖職者意識をおもんばかってのことである。現在、この作家に関して敬虔なキリスト教信者のイメージはむすびつかないかもしれない。当時としても、なにかと話題の多かった女流作家が保守的な教会関係からこころよく思われていなかったことは想像に難くない。しかし聖職者至上主義を疑問視したサンドは、宗教そのものに反感をもっていたわけでも、無関心だったわけでもないらしい。生来、理想的で絶対的な存在を憧れ求めるたちである。だからこそ世俗権力におもねり、貧窮に苦しむ民衆を疎外する教会の態度に幻滅したのだろう。

実際、この作家の人生の転換期において宗教的思想はなんらかの形で大きな位置をしめている。少女時代のある時期を修道院で過ごしたサンドは献身を決意するほどの信仰をもった。この際の宗教体験はその後の作品に多く取り入れられることになる。ピエール・ルルー（1797-1871）の神秘主義思想が『レリア』（1839年版）<sup>(1)</sup>や『スピリディオン』（1839）<sup>(2)</sup>の執筆に大きな影響を与えたことはよく言われるとおりだ。

ところで、ルルーと出会った1835年にサンドはフェリシテ・ド・ラムネー（1782-1854）<sup>(3)</sup>の知己を得、この情熱的な宗教改革家に心酔する。教皇庁か

ら破門されたラムネーが主宰する「ル・モンド」紙のために、『マルシへの手紙』（1837）を無償で執筆した。しかし、ラムネーの気に入らず掲載は中断され作品は未完となった。

小論では、サンドが諸作品のなかで主張しようとした共和思想の源泉を探ってみたい。『マルシへの手紙』を創作させたラムネーの思想とサンドの宗教観とを考察することは、作品の性格と位置づけを明らかにするのに役立つだろう。作家の社会主義的思想傾向は、聖職界が非難したような反キリスト的精神から生まれたものなのだろうか。フランスの作家を扱う場合、カトリック作家でなくとも宗教とのかかわりを無視することはできない。否定し反発するに至る経緯と理由があるはずで、それを考慮することを作品解釈の一要素と考えるからである。

### 1. キリスト教との出会いと反聖職者意識

作家が反聖職者主義をもっとも強くあらわした作品のひとつに『ラ・カンティニ嬢』<sup>(4)</sup>がある。1863年の『両世界評論』<sup>(5)</sup>誌に掲載されている。サンド自身が書簡のなかで語ったように、

Ce roman [...] est une réaction contre l'hypocrisie [...] J'ai là un millier de pages contre les curés, [...] J'ai fait un roman peu catholique [...] qui m'attirera bien des injures. (Correspondance)<sup>(6)</sup>

教皇の不謬性や懺悔制度を否定した『ラ・カンティニ嬢』の発表は当然、聖職界から非難をあげた。カトリック教会はナポレオン三世治下において、革命以前の権力を取り戻していた。そして、フローベールやボードレルの文学活動に圧力をかけたように、サンドを反宗教者だと非難し、その作品を禁書目録に数えた。1863年の教令の一部をみておこう。

Démagogue et communiste, elle (=Sand) écrit des romans humanitaires, où elle expose l'âge d'or qu'elle a entrevu et qu'elle prétend voir se réaliser par l'égalité, la fraternité, la fusion des classes dans l'amour... Pleine exaltation socialiste... Influence pernicieuse de son œuvre : cette romancière extraordinaire est presque partout éminemment dangereuse...

Aussi la Congrégation de l'Index a-t-elle voulu atteindre la généralité de ses 83 volumes...

(Romans à proscrire en vertu des décrets de l'Index)<sup>(7)</sup>

もっとも第二帝政期、聖職者を批判したのはサンドだけに限らない。1861年、ミシュレは『司祭と女性と家族』のなかで、カトリック司祭の独身と告解制度を攻撃している<sup>(8)</sup>。

Le prêtre tient l'âme dès qu'il a le gage dangereux des premiers secrets, et il la tiendra de plus en plus. Voilà un partage tout à fait entre les époux, car maintenant il y en aura deux, l'âme à l'un, à l'autre le corps.

《(Le Prêtre, La femme et la Famille)》

ルナンも『イエスの生涯』(1863年)<sup>(9)</sup>でサンドと類似の主張をしている。問題作となった『ラ・カンティニ嬢』が学生たちからは絶大な支持を得た事実からも分かるように、反聖職者思想は共和主義者たちの一般的な考えだった。

さて、カトリック教会から敵視された作家は、本当に無宗教者だったのだろうか、あるいは反キリスト者だったのだろうか。『ラ・カンティニ嬢』執筆直後の手紙から、サンドが自己の信仰心をどうとらえていたかが分かるだろう。

Je me sens beaucoup plus religieuse que je ne l'ai jamais été.

(Correspondance)<sup>(10)</sup>

ここで、ラムネーと出会うまでの作家のキリスト教とのかかわりを見ておこう。1818年、13歳半のサンドは養育者である祖母の意向でパリの修道院に預けられる。寄宿学校を兼ねた、上流階級の子女のためのイギリス系カトリック修道院である。ヴォルテールを崇拜した祖母の影響もあって、それまでのサンドはキリスト教の知識を与えられていなかった。そんな少女が礼拝堂で、*Tolle, lege* (とりて読め)、という神の声を聞いたのは1819年の夏である。

[...], je sentis que la foi s'emparait de moi, comme je l'avais souhaité, par le cœur. J'en fus si reconnaissante, si ravie, qu'un torrent de larmes inonda mon visage. (《Histoire de ma vie》)<sup>(11)</sup>

それまで反抗的で勉強にも身の入らなかったサンドが、一変して狂信的ともいえるほどの信者になる。あまりの傾倒ぶりに心配した祖母がノアンに連れ戻したので、修道院生活は二年三カ月で終わった。しかし、敬愛する修道女たちとの生活は多感な少女に絶大な影響を与えた。作家となったサンドにとっては素材の宝庫ともなる。まだJ. Sandの筆名でジュール・サンドーと共同執筆していたころの作品『ローズとブランシュ』(1831年)<sup>(12)</sup>では、修道女と女優の姉妹を主人公にしているし、『ルドルシュタット伯爵夫人』(1843)<sup>(13)</sup>、『ラ・ダニエラ』(1857)<sup>(14)</sup>、『フラマランド』(1875)<sup>(15)</sup>など多くの作品で、修道院の神秘的な雰囲気描かれる。原稿こそ残っていないが、自伝によるとジョルジュ・サンドが初めて小説を書いたのは修道院時代だという。たとえその後、教会から離れたとしても少女時代にいただいた熱烈な信仰は、作品を解釈する上で無視できない要素であろう。

熱狂的な信者となってノアンに戻った少女ではあったが、プライバシーを侵害しかねない懺悔制度を嫌ってミサには行かず個人的に祈るようになる。

少女期の、熱に浮かされたような信仰を重要視し過ぎることは危険である。

しかし、進歩的で自由奔放なイメージが先行するジョルジュ・サンドの、絶対に永遠の存在にあこがれる信心深い本質はなおざりにできない。さかのぼると、子供時代、森の中に祭壇をつくって礼拝した自作の神「コランベ」にいきあたる。虐げられた者を救いに駆けつける想像上の神は、サンドにとって善意と慈悲と愛そのものだった。

## 2. ラムネーとの出会い

ラムネーと出会ったのは、夫カジミールとの別居をめぐる訴訟や恋愛問題などで疲労困ぱいしていた時期だった。リストから紹介された小柄でやせた思想家の熱弁にサンドはすぐに魅了される。

Il ne fallait pas longtemps pour être saisi de respect et d'affection pour cette âme courageuse et candide. Il se révélait tout de suite et tout entier, brillant comme l'or et simple comme nature.

(《Histoire de ma vie》)<sup>(16)</sup>

これほどまでにサンドを夢中にさせたラムネーとは、どのような人物なのだろうか。その思想のどこに作家は共感したのだろうか。教会組織から絶縁されようとも自己が信じるキリストの真の教えに忠実であり続けたラムネーの態度と、万人が自由で平等な国家の実現を神の意志とする主張に魅かれたのではないだろうか。

1817年の『《宗教的無関心に関する試論》擁護論』<sup>(17)</sup>で無宗教者を動揺させ、キリスト教の普遍性を証明しようとしたラムネーは、教皇レオ十二世が枢機卿に任命しようとしたほどの立場にあった。ところが、1831年のポーランド事件以来ローマ教会との間に出来た溝はしだいに深まり、ついには1834年の破門宣告にいたる。ポーランドは1815年、ウィーン会議によりロシアの支配下に入れられた。カトリック教徒であるポーランド人が反乱を起こすと、教

皇グレゴリウス十六世はロシア皇帝ニコライ一世の側に立った。このポーランド事件における教皇庁の態度をラムネーは糾弾したのである。

宗教は貧窮に苦しむ大衆のためのものであるべきだとするラムネーは、『聖福音書解説』（1846年）<sup>(18)</sup>のなかで社会の不平等を嘆く。

「おお、イエスよ、あなたは1800年も前に、貧しき者、見捨てられし者、抑圧されし者、痛ましい労働の重圧と生活の重荷にあえぐ者どもを、あなたのもとに呼び、よりよき境遇を約束された。それなのにこの人たちのために地上で何が変わったであろうか。（……）人類の四分の三が、人類共通の遺産の配分からのけ者にされるという不公平は、終わりを告げることが全くないのだろうか。」<sup>(19)</sup>このラムネーの宗教観からサンドの作品にみられる社会主義的傾向と共通する叫びが聞こえてくる。

権力の座に安住し、現代社会の不幸に目を向けない宗教に人々を救うことなど出来ない。ラムネーが追求したのは、「社会がもはやわれわれに提供してくれないものの代わりとなるべき」信仰、「人間の不変不朽の本能、人々の知性の一般的な状態と調和する」信仰である。そして、司祭は「絶対的な神学の規定に従うよりも、人間とキリスト教徒の良心の自然な本能の声に耳をかたむけ」なければならない。女性であるゆえに社会の固定観念と偏見に苦しんだサンドにとって、人間性と個性を尊重するラムネーの教えは好都合だったともいえよう。

ラムネーによると、キリストは「前進するためにはいくつもの道をためす必要があるので、避けがたい意見の多様性が愛によって結ばれる人々を分裂させることを望まれない。キリストの弟子であると自負した多くのキリスト教徒は、不寛容なある種の理論に賛同し、自分と意見を共にしない者を断罪し、憎んだけれど、それは誤っている。なぜならこの憎悪から多くの迫害と宗教戦争、虐殺、あらゆる種類の暴力が生まれているのである」。『聖福音書解説』<sup>(20)</sup>

さらに、「人類に対する神の罰とか報復という観念は、神の至高の公正さの概念と両立しない。神がその被造物が苦しむのを喜んでおられるなどというこ

とが、どうしてありえようか。」(『哲学の素描』)と述べている。暗く絶望的な人生を受容させようとする教説は、既成権力者の不正や罪を正当化するために作り上げられたものなのだ。

サンドの作中人物も「地獄の存在」と「永遠の断罪」という巧みな言葉で人間性を脅かす司祭を非難する。

Vous croyez à un Dieu proscripteur de la vie [...], c'est-à-dire en guerre avec son œuvre et défendant à l'homme d'être homme [...], vous lui donnez le goût des éternels supplices [...]; vous lui avez donné l'enfer [...]! Magnifique invention à laquelle des millions d'hommes croient encore et que vous ne voulez pas renier...!

《Mademoiselle La Quintinie》<sup>(21)</sup>

さらに、ルロワイエ・ド・シャントピ嬢にあてたサンドの手紙からも同様の嫌悪感がみとれる。

C'est ma conviction, le dogme de l'enfer est une monstruosité, une imposture et une barbarie. Dieu [...] nous défend aujourd'hui de croire à la damnation éternelle; c'est une impiété que de douter de sa miséricorde infinie.

(Correspondance)<sup>(22)</sup>

神の存在を前提とする手紙から、その愛への信頼を読み取ることができる。カトリック教会からは、無宗教者の烙印を押され危険思想の持ち主と扱われたサンドだったが、反キリスト者では決してない。神に一生を捧げる決心をした修道院時代と基本的には変わらなかったことは、『我が生涯の歴史』で述べているとおりであろう。

Ma religion [...] n'a jamais varié quant au fond. [...] La doctrine éternelle des croyants, le Dieu bon, l'âme immortelle et les espérances

de l'autre vie, voilà ce qui, en moi, a résisté à tout examen, à toute discussion et même à des intervalles de doute désespéré. <sup>(23)</sup>

造り主の愛を信じるからこそ、その意志を曲げるような教会の不寛容に異論を唱えるのだろう。聖職界から敵視されたサンドの共和主義思想は、見方を変えれば、神の働き手として理想の国家を実現させようとした、ととらえることができる。その証拠にサンドの小説に登場する人物たちは、概して敬虔なクリスチャンである。作家のなかで、キリスト教と共和主義は矛盾しない、といえるだろう。

### 3. 『マルシへの手紙』

ロシアのサンド研究家カレーニンは『レリア』と『マルシへの手紙』を作家が経てきた道程の道しるべのようなものと位置づけている。一切を否定し、なにものをも信じないペシミスティックな女性を主人公にした『レリア』を問題提起の書とするならば『マルシへの手紙』はその回答の書に相当する<sup>(24)</sup>。小説は、持参金のない娘マルシに、男友達が助言と励ましを与える書簡のみで構成されている。オールドミスになることを恐れるマルシにあてた手紙をとおして、結婚制度、宗教、女性の解放や男女平等が論じられる。結婚問題を出発点とした性格上、フェミニズムの視点から語られることの多い作品である。しかし、サンドがここで提唱する自由とは反社会的でも反宗教的でもなく、きわめて節度ある自由である。

quant à ces dangereuses tentatives qu'ont faites quelques femmes dans le saint-simonisme pour goûter le plaisir dans la liberté, pensez-en ce que vous voudrez, mais ne vous y hasardez pas, cela n'est pas pour vous. (《Lettres à Marcie》)<sup>(25)</sup>



サンドの思想は保守的だと受け取られかねないほどに慎重で、後々、筋金入りのフェミニストたちから、臆病な裏切り者扱いをされた。

1848年の二月革命時、臨時政府は啓蒙活動の一環として、*Le Bulletin de la République* という「公報」を隔日で発行している。この機関紙の執筆に携わったサンドは、ここでもサン・シモン主義の女性運動家たちを批判している。一握りのインテリ女性が要求する政治参加や投票権よりも、悲惨な状況にある多くの女性の救済が先決問題であると。さらに、女性に限らず人民階級すべてを悲惨と無知から解放しなければならないと訴えた<sup>(26)</sup>。「公報」第12号を見てみよう。

Nous ne craignons pas de le dire, les tentatives de *la femme libre* dans le saint-simonisme ont eu un caractère aristocratique. [...] Il ne s'agit plus d'ouvrir un temple à quelques élus d'une théocratie déguisée. Il s'agit d'ouvrir un monde à tous les êtres qui composent l'humanité ; qu'ils soient hommes ou femmes, ils doivent échapper à l'esclavage de la misère et de l'ignorance.

こういった態度をアンチフェミニズムととらえ、「作家自身は自分の才能ゆえに一般の女性たちとは違う特別の地位にあると考えていた」(Edith Thomas)とする意見も多い。しかし、この件に関しては山方達雄氏が言うように「より巨視的に問題を据え、世論の反応を見つつ、時間をかけて、一歩ずつ着実に解放を進めようとしたのだ」と認識したい。

サンドは男性に対抗意識をもっているわけでもないし、社会や家庭において男性と同じ役割を要求したわけでもない。人それぞれには個性や向き不向きがある。しかし、神から与えられた資質は十分に生かさなければならないし、その権利を女性から奪うことは、神の意志にそむくことになるだろう。マルシに助言をする思慮深い友人はこうも言う。

[...] vous (=Marcie) le voyez, loin de moi cette pensée que la femme soit inférieure à l'homme. Elle est son égale devant Dieu, et rien dans les desseins providentiels ne la destine à l'esclavage. Mais, elle n'est pas semblable à l'homme, ...                    《《Lettres à Marcie》》<sup>(27)</sup>

さて、聖職者たちについて『コンシュエロ』のアルベールは、

《Ils prirent les clefs des consciences dans le secret de la confession.》  
 《《Consuelo》》<sup>(28)</sup>

と言って批判するが、作者自身もシャントビ嬢にあてた手紙で、

Allez à Dieu sans intermédiaire et sans prêtre. [...] Je vous avoue que pour mon compte, j'en suis venue à regarder le prêtre comme l'agent du mal en ce monde...<sup>(29)</sup>

とまで書いている。人間と神との信頼関係を損なうようなカトリック司祭の存在を告発してきたサンドは、「無謬性」を神以外の存在には認めないのである。絶対的な神への純粋な信仰と解釈できないだろうか。無宗教どころか、本来のキリスト教精神が実現する理想の国家を夢見たのだろう。『マルシへの手紙』に以下のようなくだりがあり、神を必要としないのは傲慢で利己的な態度だと訓戒する。

L'existence d'un *Dieu-Perfection* nous est si intimement révélée, qu'elle ne peut être révoquée en doute dans l'état de santé morale. Pour guérir les athées, il ne faudrait peut-être qu'observer une hygiène intellectuelle, combattre l'orgueil, la sensualité, l'égoïsme, entrer de bonne foi dans une réforme douce et graduée, ...                    《《Lettres Marcie》》<sup>(30)</sup>

「教皇無謬性」を否定して、神のみに心をむけよう、と説いたラムネーの思想にサンドが求め続けてきた真実を見いだそうとしたのは、当然のなりゆきと

いえよう。

『マルシへの手紙』は、離婚問題にふれようとしたところから、ラムネーによって「ル・モンド」での掲載を止められてしまう。フェミニストたちからは穏健的にすぎるサンドの考えだったが、ラムネーにとっては進歩的すぎたのだ。そのときの心境が『我が生涯の歴史』で述べられている。

Après m'avoir poussée en avant, il a trouvé que je marchais trop vite. Moi, je trouvais qu'il marchait parfois trop lentement à mon gré. Nous avions raison tous les deux à notre point de vue [...]. Sur ce terrain-là, Dieu admet tous les hommes à la même communion. <sup>(31)</sup>

## おわりに

これ以後、サンドとラムネーの関係は冷却していったとされるが、上文からは、二人が意見の違いをこえて互いを認めあっていることが分かる。どんな人間も尊重される寛容な社会の実現を希求したサンドの思想がうかがわれる。

サンドはラムネーだけでなく、ピエール・ルルーやジャン・レイノー<sup>(32)</sup>などの思想に次々と傾倒した。人間の真実と理想を追い求め続けたゆえだろう。作家の宗教観、共和主義思想、女性解放思想を説明するキーワードは「愛」ということになるだろうか。

1837年の『マルシへの手紙』掲載停止以後も、作家と思想家の交流は途絶えたわけではないらしい。1843年、サンドにあてたラムネーの返信につきのように書かれている。「この私は、愛することしか知りません。愛することが私の存在のすべてなのです。[...] 思想など私の目には大したことはありません。」

ルイ・ル・ギューは、「個人グレゴリウスと教皇グレゴリウスとを区別したラムネー」を「人間性の擁護者」と評している。教皇の神格化を拒むことは、「人間個人の聖なる権利を尊重する」ことだからである<sup>(33)</sup>。

サンドは理不尽な制度と束縛に息苦しさをおぼえて、カトリック教会が要求する信仰生活から離れた。しかし反キリスト者になったわけではなく、真実を追求しようとする精神は変わらなかった。その意味で、本来のキリスト教から逸脱したローマ教会の方針に妥協できなかったラムネーとサンドは同志である。二人の関係を語る時、『マルシへの手紙』をめぐっての意見の相違に重点が置かれることが多い。しかし方法は異なっても、共に新しい「理想の宗教」を探していたと解釈できるだろう。サンドはそれを社会主義思想という、師とは違った方向に見いだしたのである。

#### 使用テキスト

*Lettres à Marcie*, George Sand, Œuvres complètes XXXI, Slatkine reprints, Genève, 1980.

#### 注

- (1) *Lélia*, 1833年初版の改訂版。
- (2) *Spiridion*.
- (3) abbé félicité-Robert de LAMENNAIS, 宗教哲学者, 批評家。
- (4) *Mademoiselle La Quintinie*.
- (5) *Revue des Deux Mondes*.
- (6) Lettre à Boucoiran, le 7 mars 1863. Corr., éd. G. Lubin, t. XVII, p. 505.
- (7) Bernadette SEGOIN, *Mademoiselle la Quintinie et la religion nouvelle* (Les Amis de George Sand に掲載) 1995. p. 33.
- (8) Jules MICHELET (1798-1874), *Ibid.*, p. 37.
- (9) Ernest RENAN (1823-1892), *Vie de Jésus*, *Ibid.*, p. 38.
- (10) Corr., t. XVII, p. 503, à Thérèse Blanc.
- (11) Œuvres autobiographiques, Pléiade, t. II, p. 94.
- (12) *Rose et Blanche*.
- (13) *La Comtesse de Rudolstadt*.
- (14) *La Daniella*.
- (15) *Flamarande*.
- (16) p. 319.
- (17) *Essai sur l'indifférence en matière religieuse*, 1817-23年刊。
- (18) 1846年, 各章末にラムネーによる注と省察を付けた新訳。

- (19) 前出書 p. 42-43.
- (20) 同書 p. 155.
- (21) *Mademoiselle La Quintinie*, Slatkine reprints, 1979, p. 318.
- (22) Corr., t. XVII, p. 416, Lettre à Marie-Sophie Leroyer de Chantepie, 1863.
- (23) *Œuvres autobiographiques*, Pléiade, t. II, p. 94.
- (24) 長塚 隆二『ジョルジュ・サンド評伝』, 読売新聞社 p. 159.
- (25) p. 176.
- (26) 山方 達雄『1848年のジョルジュ・サンド (4)』1978. 『愛知県立大学・1848年共同研究会報告集』No. 4, 1978年。
- (27) p. 198.
- (28) *Consuelo*, Editions de la Sphère, 1979, p. 280.
- (29) Corr., t. XVII, p. 387.
- (30) p. 213
- (31) p. 325
- (32) Jean REYNAUD (1806-1863), 哲学者, 政治家。
- (33) Louis Le Guillou, *Lamennais*, Desclée De Brouwer, 1969. 引用したサンドへの手紙は伊藤 昇訳『ラムネーの思想と生涯』春秋社(1989年)より抜粋。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——